

# 日本統治下台湾人児童の日常生活について

## — 国語教科書を手掛かりに —

陳 虹彪

### 要 旨

日本統治時代の台湾では、日本語教育を中心とする同化教育が行われ、台湾人児童専用の国語教科書も編集されていた。本稿はこれらの教科書を用いて、教科書に記述されている内容と現実の生活には合致しているのか、それともギャップがあるのかを論じたものである。さらに、当時の台湾社会を対象とする民俗や慣習の研究資料を参考にして、教科書の内容と照り合わせながら、台湾人児童の日常生活についての考察を行っている。その結果、植民地教科書の内容には時期によって変化が見られ、教材に述べられている児童像も時期によって違っていた。多くの教材では、統治側が望む「理想像」が述べられ、子どもが営んでいる現実の生活とは完全に合致しているものではなかったことが判明した。

### はじめに

日本統治下の台湾で行われていた学校教育は、台湾総督府の主導下、台湾人を良き日本国民に教化・教育する役割を担っていた。台湾人児童が通う公学校（1941年4月以降は国民学校）では、国語（日本語）教育が教科の中心となり、統一の国語教科書も刊行された。これらの国語教科書の中には、統治側の意図だけでなく、植民地の子どもたちの生活や活動も取り入れられていて、当時の子どもたちの様子を知る上での重要な手掛かりとなっている。本稿においては、日本語の話せない台湾人の子どもたちが使う国語教科書とその中の挿絵を主な分析材料とし、衣、食、住及び娯楽生活などの面から、彼らの日常生活についての文献的考察を行う。また、当時の台湾社会を対象とする民俗や慣習の研究資料を参考に、教科書の内容と照り合わせながら、教材や挿絵の中の台湾人の子どもはどのように描かれているのか、どのような生活を送っているのか、そして、教科書の内容は実際の生活との間にギャップが存在するのかをも明らかにしていく。

### 一、「衣」 — 国語教科書に描かれる台湾人児童の服装

日本の植民地統治が始まった時、台湾人が着ていた服は漢民族の服装を改良したもので、「本島服」と呼ばれていた。写真-1に描かれている本島服の男の子たちが上半身に着ている長めの服は「長衫」といい、下に履いているのは短めのズボンである。当時台湾の生活文化や慣習を温存する方針がとられていたので、第一期の国語教科書『台湾教科用書国民読本』の挿絵に描かれている台湾人も本島服を着ている。台湾の暑い気候に対応するために、本島服のデザインは基本的にゆったりしていて、体にくっつかないようにしている。

髪型について見てみると、当時の台湾は清朝の領地だったため、男子は基本的に長い弁髪であった。女子の場合にはいろいろおしゃれな髪型があるが、長い髪の毛をそのままおろして出歩くのは失礼なこと



写真-1

と思われていた時代だったので、髪の毛を全部まとめるようにするのが基本であった。そして、亜熱帯気候の台湾は一年中暖かく、夏はとても暑い。しかし、昔は水道水などがなく、井戸や川から水を汲んでこないと体を洗うこともできなかったため、体や髪の毛を洗うのも数日に1回であった。お風呂が大好きな日本人の目からすれば、台湾人の衛生習慣は決して良いとはいえなかった。特に女の子は毎日髪の毛を洗えず、特殊な植物のオイルで髪の毛をまとめておくのが一般的であった<sup>1)</sup>。靴に関しては、一部の子どもを除き、一般の台湾人児童は日常的に裸足の場合が多かった。裸足で走り回り、畑仕事のお手伝いも遊ぶのも裸足のままであった。貧乏で靴を買ってもらえない子どもも多かったものと思われる。

しかし、植民地統治が長くなると、教科書の内容も徐々に変わっていった。例えば写真-2は第三期の『公学校用国語読本』巻一の挿絵で、写真-3は第四期『公学校用国語読本』巻一の同じ教材の挿絵である。教材の例文と挿絵の構図はまったく同じだが、主人公たちの身だしなみや家の家具などに大きな変化が表れている。第三期の教科書までは、主人公たちの服装や髪型から一目で台湾人と日本人の区別がついたのに対し、第四期の『公学校用国語読本』からは主人公たちの服がすべて洋服や制服になったばかりか、髪型からも区別がつかなくなった。一部国定教科書から取り入れた教材には、挿絵の中の主人公が着ている和服を洋服に変えて、そのまま台湾の教科書で使われたものもある。



写真-2



写真-3

挿絵の服装に現れた変化には、教材の内地化方針による影響もあるが、台湾においても洋服や制服がある程度広まってきていた現実も反映されている。1942年年末に開催された皇民奉公会主催の「生活科学展」では、当時の台湾における洋服の普及状況に関する調査の結果が発表されていた<sup>2)</sup>。この調査によると、台北市在住の台湾人と日本人の持ち服については、台湾人男性の66%は洋服、26%は和服、8%は台湾服を持っている。台湾人女性の場合は洋服が58%、和服が16%、台湾服が26%である。日本人男性の場合は洋服が53.8%、和服が46.2%で、女性は洋服が34.7%、和服が65.3%である。それと同時期の日本本土の住民が持つ洋服の割合について見てみると、男性は洋服が41.1%、和服が58.9%であり、女性は洋服が19.3%で、和服が80.7%と記録されている。

同時に台湾台北の繁華街で行った調査では、男性では年齢層を問わず、洋服を着用している人が最も多かったものの、国民服や標準服を着る人もいた。女性の場合、特に若い女性は洋服を好んでいた。この調査結果から見れば、1940年代の台湾では、和服より洋服が広く受け入れられていたということが分かる。特に都会地はすでに洋服がある程度普及していて、本土より着用率が高かったと考えられる。

## 二、「食」 — 教科書にみる台湾人の食生活

### (一) 台湾人の食事

よく聞く昔話だが、日本統治時代初期の公学校の先生を最も困らせていたのは、昼頃になったら、せっかく学校に集まってきてくれた台湾人生徒たちが自宅へ帰ってしまうことであった。なぜなら、台湾人は基本的に冷めた食事を口にせず、したがって「弁当」というのがなかったからである。昼ごはんはいったん家に帰って食べるが、そのまま学校に戻ってこなくなるが多かったようだ。

日本統治時代における台湾の日常生活や慣習等について調査を行っていた池田の研究によれば<sup>3)</sup>、台湾人にはおにぎりを作る習慣がなかったため、食事を持ち運ぶときは「鹹（ギャン）飯（パン）（味をつけた飯）を芭蕉、笹、連蕉（カンナ）等の葉に包んで持ち歩くのが一般的で、これがいわゆる台湾風の「お弁当」であった。その様子は教科書にも描かれている。このようなお弁当は1920年代頃まで台北等の地域でもまだよく見られたが、その後は徐々に日本風の弁当箱に入れられるようになったという。また、1940年頃には「飯仔層（バンアサン）」といわれる何層かに重ねて使うお弁当箱が流行っていた<sup>4)</sup>。

梶原の考察によれば<sup>5)</sup>、当時の台湾人は八仙卓という少し高めのテーブルを囲んで食事をし、座っている腰掛は背もたれのない長めのベンチだった。日常の食事は基本的に粗食で、特に農家の場合は甘藷（さつまいも）を加えた米飯もしくはおかゆと漬物のみを組み合わせたものが一般的であった。祭祀日の時にだけ鳥肉や豚肉、魚などの御馳走が食卓に並んだ。慣習上、食事をする時はまず家族の男性が食べてから、次に女性と子どもが食事をとるのが一般的だった。当時の台湾では普段、夫婦あるいは親子がともに食卓を囲んで一家団欒で食事をすることはほとんどなかった。唯一、旧暦の大晦日の晩御飯だけは「囲（ウィー）炉（ロ）」といって、家族全員がそろって食卓を囲んで食べた。しかし、日本人が編集した国語教科書に出てくる家庭での食事の挿絵は一家団欒のものばかりだ。当時の台湾社会の習慣や家庭事情が、教科書に描かれているものとはかなりずれていたことが分かる。

台湾人の食事と日本人の食事の間にはこれほど大きな差があったにもかかわらず、台湾の国語教科書には台湾人の食事に関する具体的な記述はほとんどなかった。その代わりに、台湾人の子どもがお母さんと一緒に食事を用意し、台所で手伝うシーンや、一家団欒で食事をしている場面が頻りに教材に登場していた。

台湾人の食べ物に対する好みについては、先ほども触れた1942年の「生活科学展」に、日本人と台湾人の学童と女学生の食べ物に対する好みの調査結果が残されている<sup>6)</sup>。この記録によれば、台湾人の児童や女学生が好きで、日本人が好まないのは大麺（中華めんに似ている）、家鴨、肉まん、シューマイと肉入りのちまきである。日本人が好きで、台湾人が嫌うのは玉ねぎ、トマト、牛肉と牛乳などである。台湾人も日本人も共に好きなのはさつまいも、すし、豆腐、油揚げ、南京豆、鯛、豚肉と天ぷらであり、共に嫌いな食材は苦瓜、にんじんとどじょうだった。

実は台湾人には生ものの他に、牛肉を食べる習慣もなかった。宗教上の理由もあるが、牛は農業生活を中心に営んでいる当時の台湾人にとってとても大切な財産だった。畑仕事はもちろん、荷物を運んだり、売買によって現金に変えたりするなど、牛の働きは収入につながる。そのため、台湾の人は牛肉を食べるのではなく、牛をここのほか大切にしていたのであり、国語教科書の中にも必ず牛などの家畜に関連する内容や挿絵が入れられていた。

### (二) 台湾の「市場」

もう一つ台湾の食生活に深くかかわっているのが「市場」である。まずは植民地統治が始まった頃の台湾の市場の様子を見てみよう。写真-4に映っているのは植民地統治初期の1902（明治35）年頃、市場で食べ物を売っている台湾人の姿である。写真-5は飲食店以外の店が集まっている通りの写真

である。簡易なテントを張っているのもあれば、露天で商売をやっている人もたくさんいる<sup>7)</sup>。実は植民地統治初期の台湾の市場は、道沿いに屋台店が展開され、道路の大部分が塞がれてしまっていた。当時の台湾では衛生観念が薄く、不潔でハエがいっぱい飛んでいて、売られている菓子にハエが大量に集まって止まり、真っ黒な菓子ではないかと思われるほど不衛生な状態であった<sup>8)</sup>。植民地統治の後期ではこのような不衛生な状態がある程度改善され、レンガ建の立派な市場も所々に建てられるようになったが、それは全島の隅々に及ぶまでには至らなかった。



写真-4

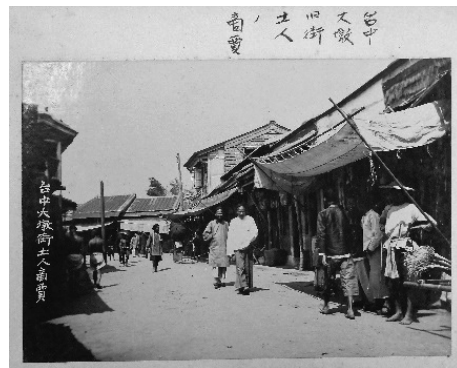


写真-5

では、教科書に出てくる「市場」はどうだったのでしょうか。それを見てみよう。写真-6は第一期の教科書に描かれた遠足の帰りに皆で通った市場の様子である。その光景は写真-5に近いが、挿絵ではある程度美化されて描かれているのがわかる。写真-7は第三期の教科書に登場した市場の挿絵である。この時期は台湾の衛生状況もある程度改善され、市場も少しきれいになってきていたので、挿絵に登場する市場も立派なものになっている。和服の女性もたくさん描かれていることから、都会地や比較的に進歩している地域の市場だと推測できる。これらの市場はどちらも台湾人の屋台形式のものではなく、しっかりとした構えの建物に入った店が中心となっている市場である。



写真-6



写真-7

### 三、「住」 — 昔の台湾家屋

台湾は亜熱帯に位置しているので、暑さを防ぐために、伝統的な台湾の家屋は日光をなるべく遮断するという方針の下に建てられていた<sup>9)</sup>。窓も防犯などの理由で小さく作られていたので、結局屋内はとても暗くなり、風通しも非常に悪く、湿気がたまってしまい、それが病気のもとにもなっていた。他方、日本人は台湾人とは違い、風を通すことで涼しくしようとしたので、日本人の住む家は大きい窓のある明るいものが多い。

台湾の伝統的家屋様式に関しては、すでに大正時代から極端な窓の狭小化による弊害が指摘されて

いた。衛生上も問題が多いという意見が出ていて、台湾での衛生思想をいくら普及させ、保健衛生の指導をいくらしても、住居問題を徹底的に解決しない限り成果が出ないと言われていたほどであった。そもそも台湾の家屋が窓を小さくした主たる理由は泥棒防止のためにあったが、それが大きな弊害をもたらしていたのも事実である。1922（大正11）年に台中州では、台湾の伝統家屋を改良して、できるだけ窓を大きくし、明るくて衛生的な建築様式に変えるために、今後新たに家を建てる時の規制を厳しくし、「従来非衛生的な家屋」を徐々に改善していくという宣言を出した<sup>10)</sup>。それとともにともとも衛生面や健康への影響が問題とされていた台湾の家の建て方や衛生改善策に注目が集まり、国語教科書にも関連教材が取り入れられるようになり、幼い期から教育を通して台湾人の考え方を換えようという試みもなされるようになった。

例えば第四期の国語教科書には、大きな窓のある家が描かれた挿絵や「僕の家窓」という教材が取り入れられている。当時の教科書編纂要旨によれば、この教材を採用した目的は「家屋に対する考えを正しくする。習俗改良の一助である」ことによると記されている<sup>11)</sup>。特にその頃には台湾の伝統家屋を改造することが急務とされていて、衛生面からみても窓を大きくして風通しや明り取りをよくすることが重要だと強調されている。この教材はこれまで台湾家屋の暗くて湿気がたまっているイメージを一新したもので、第五期の国語教科書にも何ら変更されることなく採用されつづけた。

#### 四、娯楽 — 台湾人児童の遊び

昔、農業社会だった台湾における娯楽生活は退屈なものであった。一番の楽しみとなる娯楽は神事にかかわるさまざまな催しや布袋戯（ポーデヒー・人形劇）、お芝居、講古（落語に相当するもの）だけであった<sup>12)</sup>。子どもたちも大人たちと同じようにお芝居やお祭りが大好きで、そのため第三期の国語教科書からは芝居の台本や芝居にできるような教材が取り入れられるようになった。

台湾の「廟」や神事の時に神にささげる「芝居」をみる機会は年に数回しかなく、それは数少ない娯楽の一つをなしていた。普段はみんなで一緒にゲームをしたり、魚釣りや大自然のものを利用したりして遊んでいた。当時の台湾と日本の教科書にはよくゲーム（遊戯）の教材が出てくるが、台湾人の子どもたちが遊ぶ定番のゲームは日本の子どもたちのとは少し違っていた。例えば台湾での定番の遊戯教材は鬼ごっこではなく、「ハシラオニ」というゲームだった。ゲームのルールは現代の「フルーツバスケット」に似ている。

もう一つよく出てくる遊びの教材は「タコ」だった。初学年段階の読本では単語として出てくるだけだが、学年が上がると凧作りや凧揚げなどの教材が出てくる。当時の日本本土では、凧揚げはお正月の行事だとされていたが、台湾では気候の関係で一番天気が良くて風がよく吹く旧暦の九月が凧揚げの時期である。台湾の国語教科書もこの時期に合わせて、凧や凧揚げに関連する教材をよく採用していた。当時の台湾の凧は日本の凧とは違い、台湾独自の模様や形をしていた。第三期の台湾国語教科書で主人公阿義と阿仁が作っているのは、台湾でよく見かける「八仙」という形の凧であり（写真-8）。この教材の最後では凧がブンブンと鳴って高く飛んでいる様子が強調されている。実は台湾人は、単にのんびりと凧をあげて楽しむだけでなく、必ずといっていいほど「喧嘩凧」をしていた<sup>13)</sup>。教材の中に凧喧嘩などの記述を取り入れることはなかったものの、台湾人児童にとっての凧揚げの醍醐味をなす凧がブンブンなる音が忠実に表現されていた。ちなみに、第四期以降の教科書に出てくる凧は日本と同じようなものになっていて、台湾独自の形をしている凧はその後教科書には見られなくなった。

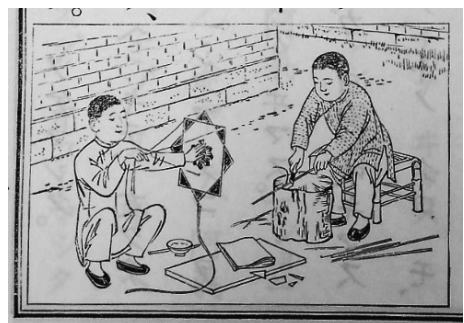


写真-8

そのほかにも魚釣り、竹細工、シャボン玉などの教材もよく採用された。実際の生活ではあまり金が掛からず、道具などのいらぬ縄飛びなども人気があった。台湾の国語教科書に出てくる遊戯教材について見てみると、描かれている台湾人児童のおもちゃは基本的に自分たちで作られる風車、凧、折り紙などシンプルな物だった。実は、昔の台湾の子どもは日本の子どもみたいに午後におやつをもらったりすることがなかったので、ほしいものがあれば、親に言ってお金をもらって買うのが普通だった。その金額はだいたい一銭くらいで、祭りの時にだけはまれに2銭、3銭くれたという。当時の1銭といえば、ピーナツやちょっとしたお菓子を一握りくらいしか買えない金額なので、あまりおもちゃや遊具にお金をかけることはできなかった<sup>14)</sup>。1930、40年代以降になると台湾の経済発展に伴って物価も高くなり、都会のお店ではきれいなおもちゃが売られるようになったものの、一般の台湾人児童、特に田舎の子の場合、お人形などの高価なおもちゃで遊ぶのは相変わらず縁の遠い話であった。

また、台湾人児童は芝居の要素が入るゲームを好む傾向がある。何らの筋書きに従いながら、自分たちでそれぞれの役を演じて進めるゲームが多かった。これが台湾の伝統的なゲームや遊びの大きな特徴をなしていた。特に商売ごっこのような設定が好まれた。芝居の要素が多かったのは、台湾人が芝居が好きだからであるが、前述したように、それには台湾の独特な民間信仰と社会文化による影響が大きく関わっていたと考えられる。例えば、台湾の祭りについての調査によれば、当時の台湾社会では「祭と芝居」の2つの事柄を別々に切り離して考えることはできなかったといわれている<sup>15)</sup>。

昔の台湾でいう「芝居」は「大戯（トゥアヒー・台湾伝統の演劇）」と言い、台湾の伝統的な芝居だった。日本の歌舞伎ほどではなかったが、メイクをしてきちんとした衣装を着た役者が演じるものを指していた（写真-9）。もちろん布袋戯（人形芝居）や皮戯（プーヒー・影芝居）もあるが、大戯に比べればこれらは地味だった。布袋戯は田舎の廟の祭りか、部落単位で開催される祭り、もしくは個人宅の庭先でやる謝願戯（シャクアンヒー）に利用されることが多かった。皮戯は廟の前の広場で送神戯（サンシンヒー）（旧暦12月31日）や接神戯（ジャーシンヒー）（旧暦1月4日）として上演されることが一般的だった。



写真-9

しかし地方や農村の廟の縁日など、重要な祭りの場合には「大戯」でないと人気がない。当日は普段都会の市場や盛り場で都会の子どもを相手にしている行商人もこの日には集まってくるので、地域での廟で行われる祭りは子どもたちにとってとてもワクワクする重要な行事だった。このような廟の祭は台湾の伝統的な行事であり、その様子が述べられている教材（第三期教科書巻五の十五「おまつり」）が国語教科書に採用されたことがある。まずその教材の内容を読んでみよう。

「だいどころの方では、きのふからごちそうをこしらへるので、大そういそがしさうです。町も人出が多くて、なか〜にぎやかです。お祭はひるからはじまるので、私は二時ごろから、弟をつれて見に行きました。向ふの方でどん〜とたいこの音がします。じゃんじやんとどらの音も聞こえます。急いでかけて行くと、もうお祭の行列がやつて来ました。からだの幅のひろい、色のまつくろな人形が、うちはをつかひながら、あるいて来ます。つゞいて見上げるやうな、せいの高い人形が、のそりのそり大またにあるいて来ます。かほをさま〜にぬつた何十人の一組が行くかと思ふと、いろ〜のかざりをしただしが、いくつも〜通ります。身うごきも出来ないほどおしあつてゐる見物人は、「あれ〜。」とさわいでゐます。その中にみこしが見えました。両がはの家ではばち〜とばく竹を鳴らします。みこしのあとには大ぜいの人がお供をして

みます。香を持つた人もみます。はたやちやうちんを持つた人もみます。私どももあとについて、町の曲りかどまで行きました。それから分れて廟へおまわりすると、あたりには物を売る店がならんでゐて、大きなこゑでお客を呼んでゐます。廟の中はおまわりの人でこみあつてゐます。せん香をあげてゐる人もあれば、ひざをついて拜んでゐる人もあります。廟のわきには見物人がたくさんあつまつてゐます。もうしばゐがはじまるのでせう、かねの音がかん〜と鳴りひびいてゐます。」

教材に述べられているように、これが台湾の子どもたちが本当に実生活で見ているお祭の様子だった（写真-10）。もちろん、この教材では台湾の信仰や台湾式の祭り、そして日本式の祭りとの違いについての説明はされていないが、台湾現地の文化がそのまま教材として取り入れられた歴史的資料としても貴重なものとなった。第四期の教科書以降になると、このような台湾の祭りに関する教材は絶えてなくなり、日本の神社や祭りを述べるものだけになってしまった。

ちなみに、子どもに関わる日本の伝統行事について言うと、台湾の国語教科書では、子どもの日に鯉のぼりを揚げたり、雛祭りの飾りつけをしたりするのは、日本のように自分の家ではなく、公学校で行われる行事になっていた。普通は日本の家庭で行われるこれらの伝統行事、まったく文化の異なる台湾人の一般家庭に浸透することは、少なくとも日本の植民地統治期間が終わるまでなかったであろう。にもかかわらず、日本の伝統や文化を台湾の子どもたちに教え込む必要があったため、それが教材として取り入れられてきたのだった。その際、教科書の中で描かれている鯉のぼりやお雛壇が飾られるのは家の中ではなく、学校になってしまい、台湾の文化と日本文化を折衷したやり方が取られることになったのである（写真-11）。



写真-10



写真-11

## おわりに

本研究では植民地時期台湾人児童の生活に着目し、彼らが使っていた国語教科書の内容について検討してきた。教科書の内容には時期によって変化が見られ、教材に述べられている児童像も時期によって違っていた。統治初期から戦争期に入るまでは子ども達の真実の姿や生活の様子が忠実に描かれることもあるが、多くは統治側の求める植民地の人民が持つべき「理想像」であり、子どもが営んでいる現実の生活とは完全に合致しているものではなかった。植民地の教科書に統治側の目的に合わせた意図的な操作が加えられているからこそ、統治者である日本は植民地台湾の住民に何を求めていたのか、どのようになってほしかったのか、その基準を具体的に知ることができるのだと言えよう。今後はさらに新しい課題を設定し、教科書に残されている植民地統治の痕跡を実証的に追及していきたいと思う。

【謝辞】 本研究は JSPS 科研費（課題番号 15K17366）の助成を受けたものである。

【引用画像について】 引用されている挿絵の写真は復刻版教科書（台湾教育史研究會策畫（2003）、日治時期台湾公學校と國民校國語讀本復刻版、台北：南天書局）及び台湾協会、筆者が所蔵しているものより撮影されたものである。

注

- 1) 沈佳姍、『阿祖へ身体清潔五十年』（2009.1）、台湾書房。
- 2) 『民俗台湾』編集部、「皇民奉公会主催生活科学展に拾う」、『民俗台湾』第二卷第十二号（1942.12.5）、pp.36-37。
- 3) 池田敏雄、「台湾食習資料 — 台北市鱈艸に於ける — 」、『民俗台湾』第四卷第一（1944.1.1）、pp.2-17。
- 4) 同上、pp.12-14。「飯仔層」というのは高さ約 30 センチほどの丸い筒型のもので、三層もしくは四層に重ねて使う。ご飯とおかずは別々に入れることができ、上に柄がついているので、手で下げて持ち歩くことも、数人分の食事を持ち運ぶこともできる。
- 5) 梶原通好、『台湾農民生活考』、pp.96-126。
- 6) 『民俗台湾』編集部、「皇民奉公会主催生活科学展に拾う」、『民俗台湾』第二卷第十二号（1942.12.5）、p.37。
- 7) 写真 4：「台中魚菜市場」、『南陲ノ風物』第一号（年代不詳）。写真 5：「彰化市場」、『南陲ノ風物』第四号（明治 35 年 7 月）。
- 8) 堀内次雄、「台湾衛生事始 — 領台当時の思い出 中 — 」、『台湾民俗』第二卷第九号（1942.9）、pp.8-9。
- 9) 堀内次雄、「台湾衛生事始 — 領台当時の思い出 中 — 」、『台湾民俗』第二卷第九号（1942.9）、pp.6-9。
- 10) 「衛生思想の普及は家屋の改善から 台中州の保甲民家屋建築規則」、「まこと」、第 239 号(8)（1922.2.4）、台湾三成協会出版。
- 11) 加藤春城、「公学校用国語読本巻五、巻六編纂要旨（一）」、『台湾教育』第 443 号（1939.6.1）、pp.21-22。
- 12) 楊達、「民衆の娯楽」、『台湾民俗』第二卷第五号（1942.5.1）、p.33。
- 13) 黄啓禾、「台湾の風」、『民俗台湾』第三卷第一号（1943.1.1）、pp.22-24。
- 14) 楊金発、「本島児童の玩具・その過去と現在」、『民俗台湾』第五卷第二号（1945.2.1）、pp.26-27。
- 15) 黄連發、「祭りと行商人」、『民俗台湾』第三卷第三号（1943.3.5）、pp.32-35。

## Children's Daily Life in Colonial Taiwan

— Based on the Japanese Language Textbooks —

CHEN, Hung Wen

In Colonial Taiwan, the integration policy including Japanese education was promoted, and the Japanese language textbooks for Taiwanese children were also edited. I analyzed these textbooks to discuss the daily life of Taiwanese children, and tried to explore how the content of teaching materials matched with children's real daily life. Were there any gaps between the real life and textbooks? Then I found that the contents of the textbooks were changed in different periods. Most of the materials described the "ideal image" made by the Japanese government, not completely matching with the real life of Taiwanese children.